水産研究・教育機構 機関リポジトリ
FRA Japan Fisheries Research and Education Agency Institutional Repository

サケの回帰率向上に向けて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八木澤, 功 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2006392

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

水産総合研究センター 研究開発情報
ISSN 1881-4557
東北水産研究レター No. 11 (2009. 3)

サケの回帰率向上に向けて

日本のサケの多くは人工ふ化放流によって維持されており、現在、その来遊数は歴史的に見ても非常に多くなっています。また、多い年には水揚げされたサケの半数近くが海外に輸出され、安心・安全な水産物として高く評価されています。(写真1)

一般には栽培漁業の成功例と考えられているサケですが、輸出はもちろん、国内への安定的な供給を図るためには越えなければならない壁があることが分かってきました。

写真１．定置網で漁獲されたサケ
（一匹まるごと、残すところなく食べる地方もある。）

サケの人工ふ化放流事業では、健康に育てた稚魚を海が生息に適した状態になる時期に放流する方針を採用し、1980年代、これが見事に当たり、放流数に対する来遊数を表す回帰率（来遊数÷放流数）は順調に上昇していきました。

ところが、1990年代以降、来遊の多い年と少ない年との差が大きく拡がるようになりました。2008年度漁期の不漁が記憶に新しいところですが、少ない年には輸出量が落ち込むばかりではなく、国内への供給や再生産に必要な卵の確保にも支障を来たすことになります。

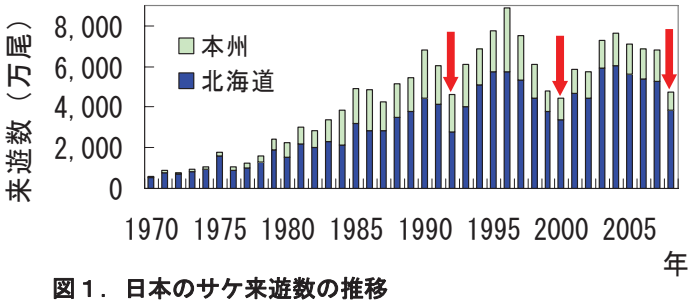

図１．日本のサケ来遊数の推移
（赤い矢印は来遊数が大きく落ち込んだ年）

このような好不漁が、放流稚魚の健康度（種苗性とも言いますが、稚魚の仕上がり具合のことと思ってください。）によって起きると考えることは出来ます。

しかし、それだけが理由なら回帰率はふ化場ごとの仕上がりに応じて変動するはずですが、北海道の例を見ると、放流ふ化場が異なっても同じ地域内にある河川の回帰率がよく似たパターンで変動しており、稚魚の健康度だけでは説明できません。また、放流された日本系サケはオホーツク海で集合するので、この時期に好不漁が決まるのなら、全国の回帰率は同じように変動するはずですが、各地域の回帰率変動は必ずしも一致していません。(写真２)

写真２．サケ幼魚を飼育している海中飼育生簀(左)と小型の巻網による幼魚採集の様子(右)

このようなことから、稚魚が放流されてからオホーツク海で合流するまでの間に、回帰率に大きな影響を及ぼす何かが存在するのだろうと考えています。

本州太平洋側サケ主産地からの回帰率向上を求める声は切実であり、回帰率低迷の原因解明と対策は急務です。

現在、東北区水産研究所調査普及課では、回帰率を向上させるため、過去に行われた海中飼育放流も手掛かりとしながら、その有効性と改良すべき点を検証し、放流技術を高度化する研究開発に取り組んでいます。

この取り組みを進めている
調査普及課の八木澤功課長

コンテンツ　① サケの回帰率向上に向けて　② ６月の海面水温が下がっ鱈？

編集：東北区水産研究所
独立行政法人 水産総合研究センター